

NAB Show 2017 に期待する

為ヶ谷 秀一

はじめに

「NAB Show 2017」は、4月22日(土)～27日(木)(機器展示会は24日～27日)の6日間にわたって、米国ラスベガス・コンベンションセンター(LVCC)で開催される。

今年のNAB Showは、「メディア」「エンターテインメント」そして「テクノロジー」の各分野が、今までより更に密接に連携し、そして融合し、急速に新しい状況を生み出している動向を捉えて、「M.E.T EffectSM」をテーマとして、展示、講演そしてセミナーなどのプログラムが企画されている。

これは、私たちの生活を取り巻く生活や仕事、余暇の使い方などが、インターネットにより接続された統合化されたシステムにより、大きく変革して来ていることを色濃く反映していると言える。

※「M.E.T EffectSM」(Media-Entertainment-Technology Effect) サービスモデル

IT'S >> THE MET EFFECT

©NAB2017

NAB コンベンションには、全てのデジタル・エコシステムが一堂に集められている。放送、デジタルメディア、映画、エンターテインメント、通信、ポストプロダクション、大学・研究所、モバイル、ワークショップ、広告、軍、政府、小売業、セキュリティ、スポーツ、ライブイベント、オンライン動画、IT、VR・ARなど、非常に広い分野に拡がった領域での最新の機器やシステムの展示と共に、多くのコンファレンスやプレゼンテーションが行われている。

昨年のNAB ShowのテーマはUNLEASHであった。メディアやエンターテインメントの分野は、テクノロジーの進化によって、それぞれの領域に閉ざされていたパワーが解放されて来ていることを意味していた。更に今年は大きく広がったメディア産業分

野全体でのイノベーションやビジネス展開により創出された多様なサービスモデルが、このNAB コンベンションに集積されてくることにより、その変革の最新状況を知ることが出来るものと期待される。

従来の放送メディアサービスの展開においても、アメリカの次世代放送システムであるATSC3.0を始め、スーパーハイビジョン(UHDTV)4K、8Kがもたらす高精細・高品質映像(HDR、HFR、WCG)、高品質音響(サラウンド)システムが、技術開発と共に、どのような新しいサービスを展開しようとしているのかを、今年のNAB大会で知ることが出来るものと期待している。

4月25日に、「Video Platform of the Future」をタイトルとした、デジタル・エヴァンジェリストとして著名なShira Lazar氏がモデレーターを務めるパネルディスカッションが、次世代を担うフロンティア達をパネリストとして開催される。

「M.E.T EffectSM」により、放送や映画製作などを中心に展開して来たテクノロジーが、ソーシャルメディア、OTT(Over The Top)そしてSVOD(Subscription Video On Demand)などの広い分野に広がって行く状況が議論される。OTTによる常時サービスのタイプと共に、放送に付随したOTTサービスなど、このセッションで提起される放送とネットとの新しい関係に向けた取り組みなども注目して置きたい。

昨年のNAB大会の規模

- ・総登録者数 103,012人(昨年103,119名)
- ・海外からの参加者 26,893人(昨年26,319名)
- ・報道関係者 1,608人(昨年1,614名)
- ・参加国数 187ヶ国(昨年164ヶ国)
- ・出展社数 1,874社(昨年1,789社)
- ・展示面積 1,063,380平方フィート(昨年より5%増)

NABにおける「NAB会長オープニング演説」

NAB Show2016のオープニングにおけるNAB ゴードン・スミス会長の年次報告(State of the Broadcasting Industry)は、秋の大統領選挙を控えた米国の状況も含めて、概略次のような内容の演説を行った。

「皆さんがここに運んできた大きなエネルギーを感じる。その熱気は、今年が大統領選挙の年だからだと言える。どちらの政党の大統領になっても、我々は、視聴者のための良い生活とローカルコンテンツを送り続けるための選択をしなければならない。FCCが先月(3月)から、スペクトラムのオークションを始めた。しかし、オークションが終わった後、オークションに参加しなかった多くの放送事業者は、ワイヤレス事業者のためのスペクトラムの空きを作るために、チャンネルの変更をすることになる。視聴者を暗闇に置かない様に、十分な時間とコストをかけて、FCCが実施してくれるものと信じている。」と述べていた。また更に、「FCCは、モバイル・ブロードバンド事業者やシリコンバレーに取り込まれ、お金を払える人へのサービスと、払う余裕のない人へのサービスを二分する政策を進めている。この政策が、全ての市民に対してローカルテレビ番組を無料で提供することより、スペクトラムの効率的な活用法である、などとは言えない。」と述べていた。

注目の次世代テレビ(ATSC3.0)への移行については、NABとしては基本的には賛成の姿勢を示しており、「高精細映像のUHDTVや、シアターの様なサラウンド音響システム、インタラクティブシステム、パーソナルサービスや、モビリティなど、我々もその可能性に期待している。しかし、次世代テレビへの移行の選択は、各放送事業者自身が選択するものである。」と、スミスNAB会長は政府による一律的な移行には同調しない姿勢も示していた。

今年4月24日(月)に行われるNABShow2017のオープニングは、「CBS Sunday Morning」で著名なJane Pauley氏の司会で行われる。NAB会長のオープニング演説は、大方の予想を覆した大統領選挙の結果を受けた新しい政府の動きを受けて、今後NABがどの様な対応をして行くのか、その基調演説も注目したい。

NAB会長の年次報告に引き続き、Hearst社CEOのSteven Swartz氏のキーノートと、ABCニュースのRebecca Jarvis氏によるQ&Aセッションが開催される予定である。

また、翌日25日には、新しくFCC長官に就任したAjit Pai氏により、トランプ政権が目指すFCCの政策について講演が行われることになっている。次世代放送やモバイル通信に関わるスペクトラムのオークション等の課題に、今後どの様に对应して行くのか、Pai氏の講演も注目される。

Future of Cinema Conference (映画の未来)

このセッションは、2002年より10回続いたデジタルシネマ・サミットから、昨年は「Future of Cinema Conference」とセッションタイトルを変えての開催となった。

このセッションは、100周年を迎えたSMPTE(米国映画テレビ技術者協会)のプロデュースにより2日間にわたって開催された。NABでは、映画のプロフェッショナルたちによる講演やパネルディスカッションが行われるコンファレンスとして毎年NAB Showオープニングに先立ち開催されている。

今や映画は劇場で上映されるだけでなく、多様なコンテンツの流通ルートを通して鑑賞者に届けられるようになってきている。また、進化する技術革新の中で、映画芸術としてのクオリティを追求することに、クリエイターたちは必死に取り組んでいると言える。しかしその状況が、果たして将来の映画を目指す方向を追求しているのかを、自らが検証を始めている。SMPTEは、この「Future of Cinema Conference」において、映画における次の100年を目

指した議論を展開している。(NAB Show 2017 web ページより)

昨年の「Future of Cinema Conference」の基調講演では、ハリウッド映画「Life of Pi」などを制作した著名な監督で、アカデミー賞を多く受賞しているAng Lee氏によって行われた。Ang Lee氏は、「Billy Lynn's Long Halftime Walk」の制作について講演した。この映画は、120フレーム、4K、HDR(ハイダイナミックレンジ)、3Dステレオスコピックで制作された初めてのメジャー作品と言える。次世代の映画制作に向けた技術開発や制作ノウハウの蓄積を目標として取り組まれており、今までの映画とも違った、新しい感覚をもたらしてくれる次世代の映画を目指したハリウッド映画製作者の積極的な挑戦が、大きな注目を集めていた。

今年のこのセッションのキーノートは、「How We Create Awe - Looking Into Cinema's Crystal Ball」と題してRob Legato氏が講演する。Visual Effects Supervisorとして著名であり、「Appollo13」など数多くの作品のVFXを担当して来ている。

また、昨年最大の話題となっていたのは、Lytro社が発表した「Lytro Cinema」システムである。映画製作用のLight Fieldカメラの開発は画期的なものである。カメラで捉えた光の情報を、マイクロレンズを通して7億5500万画素のセンサーにデジタル情報として記録し、そのRAWデータをコンピュータによりレンダリングして映像を生成する方式となっている。最大300フレームまでのフレームを自由に操作することが出来、またフォーカスポイントや絞り(16ストップ)を自由に設定できるなど、VFXのプロダクションにおいては今まで出来なかった様な効果を生み出すことが出来るトータルなプロダクションシステムとなっている。昨年発表されたカメラ本体は、非常に大きなものであったが、年内にはより実用性を高めたカメラを発表したいとも述べていた。この様なカメラが、実際の現場で稼働するようになると、映画制作のプロダクション・パイプラインにも大きな変化をもたらすとも予測されるほど画期的な研究成果の発表であった。

的な研究成果の発表であった。

今年の「Future of Cinema Conference」でも、Light Fieldカメラによる映画制作についてのプレゼンテーションが予定されている。また、VR/AR/AIそしてdeep-learningなどの技術による臨場感などをめたらす技術の映画への応用や、HDR(ハイダイナミックレンジ)などの映像クオリティに関する新しい技術進化などに対する議論も展開される予定である。

おわりに

放送メディアが4K・8K UHDTVへと急速に進化をしている中で、映画の世界もハイフレームレート、HDRや高色域映像(WCG)への取り組みを積極的に進めている。

NHKは、今年もFutures Parkで、実用化を目指して進化を進めている8Kスーパーハイビジョンの技術を紹介する予定になっている。そこでは、22.2チャンネル音響と350インチのスクリーンにより、最近制作された8Kコンテンツの上映が行われる計画である。また、今年は、近い将来をイメージしたリビングルームにおける8Kディスプレイと22.2チャンネルのサラウンド音響などによる展示デモが計画されている。

昨年8月1日の衛星(BS)による試験放送の開始と共に、実用化が進む8Kスーパーハイビジョンシステムの進化をデモンストレーションすると共に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組みに対しても、各国のプロフェッショナルからも注目される展示となるものと期待される。

4K・8K-UHDTVの進化と共にシステムのIP化が加速されて来ているが、統一した規格化を目指す動きが一段と進むものと期待される。そして、これらがクラウドにどの様に接続され、どの様な新しいサービスの創出につながる見解を得ることが出来ることを、このNABShow2017に期待している。

Hideichi Tamegaya